

モンテンルパのうた

■7■

兵士が遺す言葉

モンテンルパとは別の刑務所に服役した戦犯もいた。フィリピン独立前の米軍の裁判で裁かれた戦犯は、マニラ近郊の収容所を経て、東京・巣鴨プリズンに送られた。熊井敏美さん(91)は東京都練馬区でもその一人だ。

敗戦はフィリピン中部にあるパナイ島の山中で迎えた。ゲリラに脅された子どもが有線地雷のスイッチを押し、車を爆破。笑顔の女性に勧められジュースを口にし、ほぼ全員が毒殺された小隊もあった。「女、子どもにも油断するな」。幾度となく戦訓が出された。熊井さんも、手足をバラバラにされた戦友の遺体を見て、頭に血が上るの

民間人自決の痛み胸に

資料館建設に尽力

「最後の仕事」

よう頼んだ。判決は、懲役25年。「事実はどうあれ、生きるための法廷戦術」と振り返る。

巣鴨プリズンを出たのは54年2月。その2カ月前には、モンテンルパから戻り、巣鴨に収容された死刑囚が一斉釈放されていた。熊井さんにとって過去と決別しての再出発だった。だが、17年後

に再び戦争と向き合うことになる。

「父が死んだ場所を覚えてくれませんか」。71年、東京・丸の内で会社の職場を一人の女性が訪ねてきた。パナイ島で親交のあった日本人学校の校長の娘だった。

45年3月、校長ら日本人約40人が、敗走を強い

られた日本軍に付いて山中をさまよっていた。子どもや女性が飢えと疲労で歩けなくなり、部隊の足手まといとなることから集団自決に追い込まれた。

「お前は歩けるのだから兵隊さんと行きなさい」と父にしかりつけられ、家族と別れた——と自決の後に話していたの

現場を探し当て、遺骨約90柱を持ち帰った。これをきっかけに、熊井さんは戦争体験を語り、慰霊に力を注いでいく。77年にパナイ島での体験をつづった本を出版、80年には戦友から資金を募り現地に慰霊碑を建設した。慰霊碑近くには来春、戦争資料館も完成する。「民間人がここで自決したと知れば、フィリピンの人たちも慰霊してくれる。日本とフィリピンの友好の礎にした」と語り、資料館の完成を「私の最後の仕事」と位置づける。

「殺害は命じていない」と主張。「通訳が命令なく住民を殺した。その通訳は軍規に従って処罰された」と戦友に証言する



パナイ島での戦闘を振り返る熊井敏美さん(小出洋平撮影)



フィリピンから移送された戦犯らが収容された巣鴨プリズン。熊井さんは29歳からの7年間をここで過ごした(1949年撮影)

が当時小学生の彼女だ。日本人を反日感情が強い町に残すよりは連れて行くのが安全、と進言したのが部隊副官の熊井さんだった。

記者が「ようやく戦後が終わりますね」と向けると、「そうなるね」とうなずいた。多くの死を見てきたし、自らも死と対峙してきた。「ただ、慰霊はできても、戦争には死ぬまで言えないこともあるんですよ」【林哲平】

「あの時違う判断をしていれば」との思いがあった。島に再び元戦犯が行く危険も感じたが、その後悔が背中を押す。熊井さんは72年11月、女性とパナイ島を訪れて自決

つづく